



佐伯市養賢寺藏

毛利高標公書の解読

狩 生 熊 義

(賛助会員・佐伯市戸穴)

まえがき

養賢寺庫裏に第八代藩主毛利高標公書の扁額がある。高標公は申すまでもなく、四教堂を設立し、蔵書八万冊と言われる佐伯文庫をおこした学者大名である。公は能筆でその扁額はわれわれ一般人には読めないで、狩生先生に読みと解説をして頂いた。(編集子)

読 み

宋の趙清猷公は名は杼、字は閔道平生清動にして欺かず、凡そ一日行ふ所の事、夜に至って必ず香を焚き天に告ぐ。告ぐべからざる者のごときは敢て為さざるなり。故に史は稱して閔道となす。

治心はそれ天地神明昭々として欺き難く、その実に要緊たる処は全く一點に在り、心頭惟事に随いて検點し能く吾が心の天に事え而る後能く在天の天に事う。世人は昏迷し、勢利顛倒し、残忍至らざる



所無し、此れ心の天すでに先づ死せり。上は天を畏れず、中は法を畏れず、下は人を畏れざる所以なり。然れば則ち心を治めんと欲する者は清獻公を以て法となさざる

べけんや。寛政己未の端陽の前二日、張伯行の養正類編の語を録して古賀親克に与う。藤高標

解 説

宋の趙清獻公は平素謹直で、一日中の行動を夜には香を焚いて天に報告して反省した。報告出来ないような恥ずかしい事は、決してしない。故に史家は彼を閔道という。心を治めるには昭々たる天地神明は欺けないと堅くこの一点に誓い、心頭たゞ事を行うごとによく吾が心の天即ち良心に随って行えば、在天の天即ち神の心にも叶う。世人の心は迷って道理が顛倒している、残忍極まりないことをする、これが心の天即ち良心がもう死んでゐる。神を畏れず法を畏れずというものである。そこで治心を願う者はこの清獻公を範とすべきでは無からうか。寛政己未の年（一七九九）端午の節句二日前、張伯行の著養正類編の話を録して古賀親克に与える。 藤高標

張伯行とは儀封県の人で清朝の初期康熙二十四年の進士で礼部尚書という大臣級の人である。歴官二十年、剛直を以て知られた人で、治は養を以て先となし教を以て

本となすと、朱子の学を主としている。数千の門人あり、著書は、遵学源流、道統録、小学伊洛渊源録、小学衍義、養正類編、続近思録等多数あり。卒して太子太保を贈り清恪とおくり名している。

藤高標とは第八代藩主毛利高標公のことで、藤とは藤原氏を意味する。公は仁慈の徳高く在位中には一死罪者無く、敬神崇仏、学問真理の探究者で二六時中書を親しみ博学達見、文武は国家の根本なりと学問を奨励し教育に熱心であった。矢野黙斎を文教講師とし、山本七兵衛を世話係とし、日田より松下筑陰を招いて師範に任じ、自らも講に出席した学問好きの殿様であった。『雅衍』という著書もある学者である。殊に筆蹟の優れた点では殿様芸ではない。専門書家の随一であることを強調するものである。特にこの書は高標公四十五才の時の書で、四十七才の生涯では晩年の傑作といふべき貴重な文化財である。中興の英主高標公の片鱗を紹介して擱筆。

死生亦大矣
此心上方畏
天中亦畏
法下亦畏
畏之也
先則死
治心者身
大

行卷正
日錄法作
瑞陽前二
宗子也未
法中哉
不備公為

不備公為
賀親
與古
探言探
二
二